

上智大学

二〇二一年度一般選抜（学部学科試験・共通テスト併用型）

学部学科試験サンプル問題

外国語学部 英語学科・ドイツ語学科・フランス語学科

イスパニア語学科・ロシア語学科・ポルトガル語学科

【学部学科試験名】

外国研究に必要な基礎的知識・日本語の読解力・論理力・思考力を測る試験（マーク式・記述式併用）

※学部共通試験のため、一度の試験で複数学科の併願が可能

【試験時間】 六〇分

【出題の意図、求める力等】

現代における日本と世界の諸側面ならびにその背景についての基礎的知識を有機的に関連づけて思考できるかを問うとともに、日本語の文章読解とそれにもとづく適切な文章構成・表現を行う能力を測る。

※サンプル問題の出題形式は例であり、問題数は本試験と異なる場合があります。

一

以下の問題について、該当するものを一つ選びなさい。

問一 日本国憲法の内容として、正しいものを選びなさい。

- ① 国民の義務は、納税・勤労・公共の福祉の尊重の三つである。
- ② 自衛隊の存在が明記されている。
- ③ 裁判所には、憲法裁判所・最高裁判所・下級裁判所がある。
- ④ 地方自治は首長（執行機関）と議会（議決機関）の二元代表制である。

問二 次の国のうち、ヨーロッパ大陸において国境を接する隣国が最も多い国を選びなさい。

- ① フランス
- ② ドイツ
- ③ チェコ
- ④ オーストリア

問三 次の四言語のうち、他と系統が異なるものを選びなさい。

- ① ハンガリー語
- ② ブルガリア語
- ③ ポーランド語
- ④ クロアチア語

問四 軍備管理・軍縮に向けた世界の取り組みについて、正しいものを選びなさい。

- ① 日本に原爆を投下した国は米国であるが、同国の大統領が在任中に被爆地を訪れたことはない。
- ② 1987年、米ソ両国は中距離核戦力（INF）全廃条約によって核軍縮を進めたが、現在も同条約は有効である。
- ③ 核拡散防止条約（NPT）は、米国・ソ連（ロシア）・中国・英国・フランス以外の国家が核兵器保有国となることを防止するための条約である。
- ④ 2017年に採択された核兵器禁止条約は、批准国数が規定に達し発効している。

問五 21世紀の出来事について、誤っているものを選びなさい。

- ① ロシアのクリミア併合に反発し、欧米諸国や日本は制裁を行った。
- ② 米国が主導する国連軍によってイラクのフセイン政権が打倒された。
- ③ ニューヨーク、マドリッド、パリなどで宗教的な過激派組織によるテロが起き、多数の死傷者が出た。
- ④ 南米で初めてのオリンピックがリオデジャネイロで開催された。

問六 江戸時代後期に活躍していた音楽家の氏名を選びなさい。

- ① アントニオ・ヴィヴァルディ
- ② ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト
- ③ モーリス・ラヴェル
- ④ グスタフ・マーラー

問七 戦後日本について、正しいものを選びなさい。

- ① 女性参政権が初めて認められ、一時、女性議員は国会議員の4割を超えたが、現在の女性議員比率はそれよりも低い。
- ② 農家の土地所有権を強化した農地改革が成功し、高度経済成長期にかけて農村人口が増え続けた。
- ③ 1974年にアジア初のオリンピックを東京で開催し、高度経済成長の成果を世界に示した。
- ④ サンフランシスコ平和条約によって独立を回復した後も、小笠原諸島はアメリカ合衆国の施政権下にあった。

問八 経済の歴史について、誤っているものを選びなさい。

- ① 17世紀に江戸幕府は外国との交易は長崎でオランダとのみ行うこととした。
- ② スペインから独立したオランダはアジア内交易の拠点として、17世紀には台湾を占拠していたことがある。
- ③ 多くのアフリカ諸国が独立した1960年は「アフリカの年」として有名だが、その後も経済的には先進諸国に対して従属的な立場にあった。
- ④ ヨーロッパ人による大航海時代以前に、ムスリム商人はインド洋、アフリカ東海岸、東南アジア、南シナ海を結ぶ交易ネットワークを構築していた。

問九 以下の各項目を時系列順に並べたとき、最も遅く起きた事象を選びなさい。

- ① 東西ドイツ統一
- ② ソ連・ゴルバチョフ政権の成立
- ③ マルタ会談（冷戦の終焉）
- ④ ソ連によるアフガニスタン侵攻

問十 国と主な公用語の対応づけが正しい組み合わせを選びなさい。

- ① コロンビア・ポルトガル語
- ② オーストリア・英語
- ③ イラン・アラビア語
- ④ ベネズエラ・スペイン語

二 次の文章を読んで設問に答えなさい。

一九八九年一月七日午前六時三三分、昭和天皇が死去した。享年八七歳であった。閣議は、新元号を「平成」と決定した。平成とは、『史記』『書経』が出典で（「内平外成」、「地平天成」）、首相談話によると、「平成」は「国の内外にも平和が達成される」ことを祈願したものである。

「昭和」も同じで、『書経』の「堯典」のなかの「百姓昭明、万邦協和」からとった。ひとことでは、君臣一致して世界平和に邁進する、という理想を唱ったものだったのである。アメリカの雑誌『コンテンポラリー・レビュー』は、「昭和」を「輝ける平和」(Radiant Peace)と翻訳した。だが、「戦前昭和」は、平和な時代どころか、相次ぐ戦争に明け暮れた。

昭和が終わった直後の読売新聞社やNHKの世論調査によると、「昭和」で思い浮かぶ言葉の上位は、一位「戦争」……二六・〇％、二位「平和・自由」……一一・四％、三位「高度成長・発展」……一〇・七％である。また「戦前社会の印象」は、多い順番からあげると、「戦争の悲惨さ」(四三・一％)、「軍国主義のおそろしさ」(三七・八％)、「近所づきあいのあたたかさ」(三四・六％)、「飢えや貧困のみじめさ」(二六・六％)、「天皇のために命をすてることのむなしさ」(二二・六％)である。

これに対し、「戦後社会の印象」は、「家庭電気製品がそろい、便利な生活ができるようになった」(八〇・〇％)、「レジャーや旅行が手軽に楽しめるようになった」(五七・九％)、「地価が高騰し、国民の生活を圧迫した」(五一・〇％)、「^(三)公害や自然破壊が広がり、生活環境が悪くなった」(五〇・五％)の順であった(『昭和二万日の全記録』19)。要するに、戦前は「戦争、貧困、天皇、近所づきあい」がキーワードであり、戦後は「平和、成長、便利な生活、環境破壊」がキーワードである。いわば、ここには平均的な「昭和時代」観が示されていると言えよう。

では、昭和という時代はどんな時代だったのだろうか。本書は「戦後史」を対象とする書物なので、戦前昭和は扱わないが、昭和とは何であったかを簡単に述べておきたい。

世論調査にも表れていたように、戦前と戦後の印象は対照的であり、歴史的にみても、戦前・戦後は構造も違えば、国際環境もまったく異なる。そもそもこの時代を昭和という一つの元号で括ること自体、無理がある。元号使用の不便、不適切さは昭和時代を扱うときに、とくにするとく表れる。それゆえに私は本書では、西暦を一貫して使用してきた。

しかし、「昭和」は明治時代の四五年、大正時代の一五年を合計したほどの長期にわたっており、歴史的な大変化・大変革を経験したという点でも他に例をみない。昭和初期の大恐慌、満州事変、日中戦争、太平洋戦争、原爆投下そして敗戦。つづく連合国軍による占領の数年間に、我々は旧体制が音をたてて瓦解していく姿を目の当たりにした。約七年間の占領が終わって、日本は国際社会に復帰し、一九六〇年代にはパクスアメリカカーナの枠組のもとで驚異的な高度経済成長を遂げた。しかし、七〇年代の二度の X に遭遇して、「成長神話」は崩壊し、七〇年代以降、日本は明治維新、戦後改革につぐ第三の変動期に入った。日本に即して見れば、以上のようにまとめることができるが、あまりに一国史的である。では、視野をもう少し世界に広げたと

き、どう見えるであろうか。

私は、昭和初頭という時代は、『大転換』の著者カール・ポラニーのいう一九世紀システムの終わりに際会していたと考える。一九世紀システムとは、①国際金本位制、②バランス・オブ・パワー、③自己調整的市場経済、④自由主義国家、以上四つの組み合わせを指す。一九三〇年代は、金本位の祖国イギリスの金本位離脱をもって、①国際金本位制が崩壊し、ドイツ・ナチズムの台頭、再軍備によって、②のバランス・オブ・パワーが崩れ、そして④自由主義国家体制が後退した。さらに世界恐慌の猛威の中で、③市場経済の機能が麻痺した。この市場機能の麻痺が何と言っても、一番大きい。第二次世界大戦は、この一九世紀システムの終焉と重なって、勃発したのである。

私の判断では、一九世紀は産業革命の時代（拡大・浸透の過程）であり、世紀末には一九世紀末大不況を経験し、その中から帝国主義の時代が始まった。二〇世紀を超えてもこの構造は基本的に変わらず、第一次世界大戦（帝国主義間戦争）まで維持された。第一次大戦を境に、パクス・ブリタニカ（大英帝国による平和）は壊れはじめ、ポンド体制も弱体化した。中心はイギリスからアメリカへ移りつつあったが、まだ移行期であって、世界には楕円の中心のように英米という二つの中心があった。そのような状態の中で、世界は大恐慌に投げ込まれたのである。

The Great Depression と大文字で書けば、ふつう一九三〇年代世界大恐慌を指すが、世界各国は協力して、大恐慌を押さえ込むことはできなかった。一九三三年六月、ロンドンに六四か国の代表が参加して行われた世界経済会議は、第二次大戦前最後の世界経済会議であったが、失敗した。

大英帝国イギリスは、恐慌克服のリーダーシップをとる実力はすでになく、イギリスから覇権を奪いつつあったアメリカにもその意思はなかった。当時、世界は一種のインターレグナム（帝王死去・廢位による空位時代）に遭遇しており、有効な国際協調システムを作ることできなかった。これがまた大恐慌を長引かせる要因となったのである（キンドルバーガー『大不況下の世界』）。

各国は経済ブロックをつくって対立し、経済ブロックの対立は、やがて軍事ブロック間の対立に発展し、ついには第二次世界大戦の要因の一つになっていったのである。その意味では、大恐慌から第二次大戦終結までの一五年間は、一九世紀システムの崩壊から二〇世紀システムへの壮大な過渡期に位置していたといえよう。言い換えれば、大恐慌を境に、二〇世紀システムへの移行は始まったが、米ソ冷戦を基軸とする二〇世紀システムへ実質的に移行するのは第二次大戦後であったと見ることでしよう。

第二次世界大戦後、国際連合、IMF、ガット、世界銀行が創出された。またアジア、アフリカ地域で旧植民地が独立したことによって、世界は戦後体制に移行した。冷戦の起源をいつとみるか、多くの議論があるが、米国の日本への原爆投下は、戦争終結後の東アジアにおけるソ連の影響力の排除、アメリカ主導の対日占領を視野におさめていた（油井大三郎『日米 戦争観の相克―摩擦の深層心理』）。その意味で冷戦は、すでに第二次大戦末期に始まっていたとも言える。一九四七年の欧州経済復興計画と四九年中国革命、五〇年 Y の勃発により冷戦は世界的な規模で本格化した。以上の経緯をもって世界は二〇世紀システムへの移行を完了したのである。

昭和時代とは、こうした文脈で位置づけたほうが元号で区切るよりも、はるかにわかりやすく、視野もひろがる。そして一九八九〜九一年のベルリンの壁の崩壊、東欧社会主義の瓦解、ソ連邦解体をもって冷戦体制は終わった。したがって昭和天皇の死は、結果として、冷戦の終わりとなっていたのである。当時、チャーチル、ルーズベルト、蔣介石、ムソソリーニ、ヒトラー亡きあと、昭和天皇の死をもって第二次世界大戦の指導者はすべていなくなったと言われたように、確かに一九八九〜九一年の「激動の二年」は、(E)「一つの時代の終わりを象徴していた。「激動の二年」を戦後六〇年の歴史において最大の画期とみる研究者は少なくないが、私も同じ意見である。

ちなみに、イギリスの歴史家エリック・ホブズボームは、二〇世紀を第一次世界大戦の勃発からソ連邦崩壊の一九九一年までとし、「短い二〇世紀」と特徴づけている(『二〇世紀の歴史』上下巻、河合秀和訳)。ここでの叙述との違いは、移行の画期を第一次世界大戦に置くか、大恐慌に置くかにある。私見では、ヨーロッパにとって第一次世界大戦は決定的な転機であったが(シュペングラ『西洋の没落』)、アメリカ、日本にとっては大恐慌の影響のほうが大きかった。

中村政則『戦後史』岩波新書、二〇〇五年、一八〇〜一八七頁

(ただし、原文にある小見出しは省略した)

問一 二重傍線部(二)について、戦後日本における四大公害病の名称の空欄を埋めなさい。漢字のみで表記すること。なお、空欄には同じ語が入る。

四大公害病…病、新潟病、イタイイタイ病、四日市ぜんそく

問二 空欄X、Yに入る、適切な出来事は何か、答えなさい。漢字のみで表記すること。

問三 二重下線部(E)について、著者の言う「一つの時代」としての昭和時代は、世界のなかの日本にとってどのような時代だったとされているか、一五〇字内で説明しなさい。

【解答(例)】

□

問一 ④

問二 ②

問三 ①

問四 ③

問五 ②

問六 ②

問七 ④

問八 ①

問九 ①

問十 ④

□

問一 水俣

問二 X 石油危機

Y 朝鮮戦争

問三 昭和初期の1930年代には大恐慌の影響で19世紀システムが崩壊したことが第二次世界大戦につながり、戦後には20世紀システムとしての東西冷戦構造の下で高度経済成長を遂げ、昭和の終わりと前後した冷戦終結によって20世紀システムが終わるといふ、世界全体で一つのシステムが始まり、終わっていった時代。(139字)